「創エネ」市民プロジェクト代表　徳留 佳之さん（52歳）

エネルギー地産地消

■ズーラシア構想

「環境を考えた街づくりのため、エネルギーの地産地消をやろうと思いました」

地元・横浜市旭区の顔ともいえる「よこはま動物園ズーラシア」で使用する電気を化石燃料に頼らず、自然エネルギーで賄う―。そんな「エコエネ・ズーラシア構想」を打ち出し、仲間十数人で、「開国博Y150」のヒルサイドエリアの企画として出展した。

エネルギーを自らつくり出す「創エネ」の考えを広げるのが狙い。ズーラシア側の担当者は「動物園は自然環境を守ることを学ぶ場。考え方はぴったり」と歓迎した。

問題は、何を使って発電するかだった。当初、動物のふん尿を使うことも考えたが、飼育されている肉食動物のふんは発電に向かず、量も少ないことから断念。そこで、目を付けたのが太陽光。「騒音や振動がなく、温室効果ガスも出ないので、動物に影響しない。ベイエリアが（風力発電の）『ハマウイング』なら、ヒルはソーラーだと。シンボルとしてつくりたい」

屋根載せ用の太陽光パネル（年間約三千キロワット、縦約三メートル、横約八メートル）の設置には、百五十万円が必要。今年一月から、動物の絵はがきを一セット（五枚）五百円で有償配布し、寄付を募った。「動物写真を撮ったフリーカメラマンとデザインは旭区内の住民、印刷も区内の会社に頼んだ」。ここでも、地産地消にこだわった。

■地域の自立意識

市民活動に積極的に参加するようになったきっかけは、米中枢同時テロ（二〇〇一年九月）。「アメリカのグローバリゼーションはおかしいと思った。地域が自立してやっていかなければと。仕事がフリーになってから、時間も使えるようになった」。今では、五つほどの市民団体に所属している。

太陽光パネル設置のための資金集めは八月までに、めどが立った。設置場所の無料休憩施設「ころころロッジ」は年間の電気使用量が一万五千キロワットで、うち二割を賄う勘定だ。

太陽光パネルは「Y150ズーラシア　おひさま市民発電所」と名付けられた。今月二十一日に点灯式が行われ、「Y150」閉幕後もこの場所で〝活躍〟を続ける。

「自然エネルギーに移行していくという次世代へのメッセージを込めました」。小さな発電所に、地元を愛する人たちの大きな願いが詰まっている。

（荒井六貴）

私の履歴書

1956年　東京都で生まれる
85年　早稲田大を卒業後、出版社に勤務
97年　横浜市旭区に転居
2003年　転職先の広告代理店を辞め、フリー編集者に
08年　「エコエネ・ズーラシア構想」を提唱
09年9月21日　ズーラシアに太陽光発電機を寄贈し点灯式

元気人@かながわ